平成二十九年度

浦田定期能

第三回

素謡

杜野頼

若宮政

山崎浩之　越賀隆之　浦田保親

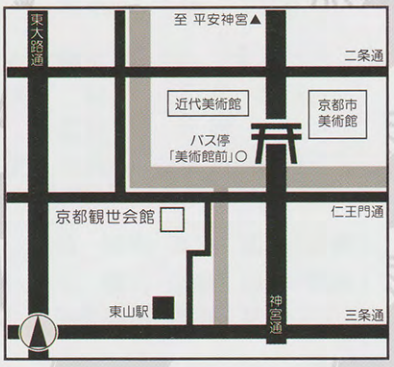
日　時：平成29年　9月　2日（土）

正午開演（11時20分 開場）

於　：京都観世会館（京都市左京区岡崎円勝寺町44）

入場券：前売券　¥3,500
当日券　¥4,000
学生券　¥2,000（全席自由席）

◆市バス5・27系統「美術館前」下車
◆市バス46・31・201・203系統「東山仁王門」下車
◆地下鉄「東山」駅下車、徒歩約5分
◆会館東隣に駐車場あり



主催：浦田定期能楽会

お問合わせ：浦田定期能楽会　☎(075)723-6850
京都観世会館　☎(075)771-6114

第三回 浦田定期能公演

平成 29 年 9月 2日（土）

12:00

解説「本日の曲目について」京都府立大学教授 山崎 福之

12:30

能楽「頼　政」

尉 源三位頼政	浦田 保親
旅　僧	福王 知登
里　人	茂山 逸平
（笛）	光田 洋一
（小鼓）	曽和 鼓堂
（大鼓）	山本 哲也

（後見）深野新次郎・片山 伸吾

（地謡）深野 貴彦・松野 浩行・橋本 忠樹・宮本 茂樹
河村浩太郎・山崎芙紗子・樹下 千慧・浦田 親良

— 休 憩 15 分 —

素謡「野　宮」

里女 六条御息所	越賀 隆之
旅　僧	浦田 保浩

（地謡）小野 朗・浦田 保浩・越賀 隆之
〃 宮本 茂樹・河村浩太郎・田中 隆夫

狂言「惣　八」

惣　八	茂山七五三
出　家	茂山あきら
有徳人	網谷 正美
（後見）	増田 浩紀

仕舞	老　松	杉浦 豊彦
	巴	浦田 親良
	松　風	浦田 保浩
	善知鳥	片山 伸吾

（地謡）深野新次郎・松野 浩行・橋本 忠樹・河村 和貴

— 休 憩 15 分 —

16:00 頃

能「杜　若」

杜若の精	山崎 浩之
旅　僧	小林 努
（笛）	左鴻 泰弘
（小鼓）	林 大和
（大鼓）	渡部 諭
（太鼓）	前川 光長

（後見）浦田 保親・深野 貴彦

（地謡）浦田 保浩・古橋 正邦・越賀 隆之・橋本 光史
河村 和貴・山崎芙紗子・田中 隆夫・樹下 千慧

附祝言

終了予定 17：20頃

能　頼 政（よりまさ）

『平家物語』に基づき、武将であり歌人でもあった老武者源頼政の、平氏追討の戦に敗れて果てた有様を描く。「実盛（さねもり）」、「朝長（ともなが）」と並んで三修羅と称される難曲。世阿弥作。

諸国一見の僧が宇治を訪れ、風光を愛でていると一人の老人が現われ、僧の求めに応じて眺め渡される数々の名所旧跡を教える。そして平等院の「扇の芝」へと案内し、宇治橋の合戦に敗れた源頼政の自害の跡と語り、我こそ頼政の霊と明かして消えてしまう。（中入）

僧が頼政の菩提（ぼだい）を弔っていると、頼政の亡霊が現われ、平家方（伊勢武者という）を網に掛かった氷魚（ひお）に見立てた歌「伊勢武者は皆緋縅（ひおどし、氷魚との掛け詞）の鎧（よろい）着て宇治の網代（あじろ）に掛かりけるかな」を詠み、宇治橋の合戦を物語る。後白河院の皇子、高倉宮以仁王（もちひとおう）を奉じて平等院に陣を構えたが、平家方は宇治川の急流を押し渡り乱戦となり、頼政が頼みとする息子達も討たれて覚悟を決め、「埋もれ木の花咲くことも無かりしに身の成る果てはあはれなりけり」の歌を詠んで自害したのである。やがて頼政の亡霊は弔いを乞いながら草陰に消えていった。

素謡　野 宮（ののみや）

『源氏物語』賢木（さかき）の巻に拠る。秋の嵯峨野を訪れた光源氏と、伊勢に下る六条御息所（みやすどころ）との別れを、うら寂しい風情の中に御息所の愛惜の心を通して描く。野宮とは、未婚の内親王が伊勢斎宮に下る前に一年間潔斎（けっさい）のために籠もる宮。

秋の末に旅の僧が黒木（くろき）の鳥居と小柴垣（こしばがき）がたたずむ野宮の旧跡を訪ねると、一人の女が現れ、昔光源氏がちょうど今夜、御息所を訪ね、変わらぬ心を示す榊の枝を斎垣（いがき）の中に差し入れた時に、御息所が「神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ」と詠んだことを語って昔を偲ぶ。そして自分こそ御息所の霊であると明かして消える。

弔いのうちに御息所の霊が現れ、賀茂の祭の日、源氏の正妻葵上との車争いでの憂悶、妄念を解いてほしいと願う。そして松虫のすだく秋の野宮の風情をなつかしみながら、また車に乗ってあの世へと去って行った。迷いの世（火宅、かたく）から成仏できたかどうかはわからぬままに。

能　杜 若（かきつばた）

ある男（在原業平といわれる）が何人かの友とともに都から東（あずま）に下る途中、三河（みかわ）の国八橋（やつはし）のあたりで沢辺に杜若が美しく咲いていた。そこで「かきつばた」という五文字を句の上（かみ）に置き、旅の思いを詠めと言われた男は、次のように歌った。

からころもきつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞおもふ

（唐衣は着ていると褻（な）れる一古びてくるーが、わたしにはその馴れ親しんだいとしい妻が都にいるので、はるばる来た旅をしみじみ物悲しく思うのだよ）

これを聞いた人々はみな都恋しさがつのり涙を流したので、干し飯が濡れてふやけてしまった。業平の歌には二条の后への叶わぬ恋心が秘められていたのである。

この『伊勢物語』第九段（東下（あずまくだ）り）に基づいて構想された曲。

諸国一見の僧が都から東国に下り三河の国八橋に着くと、美しい女性が現われ、『伊勢物語』の故事を語って、僧を庵へと誘う。（物着）

女性はやがて、業平の形見の冠（初冠（ういこうぶり））と二条の后の唐衣（長絹（ちょうけん））を身につけて現われる。そして杜若の精と名のり、業平と高貴な女性たちとの恋を語って静かに舞う（序之舞）。それは杜若の精と業平と二条の后の姿を三重に重ねた麗しい姿であった。そして、草木成仏の御法（みのり）によって成仏できるといいながら、夜明けとともに消えていった。

※ 事務局で許可した以外の方の写真・ビデオ撮影・録音はお断り致します。

※ 場内では携帯電話等の電源はお切りください。

※ 車でお越しの方は、京都観世会館東隣の有料駐車場をご利用ください。満車の場合は平安神宮前の市営有料駐車場をご利用ください。

主催 浦田定期能楽会

【次回予告】平成 29年 12月 10日（日）

能	「通 小 町」	田中 隆夫
能	「海　士」	山崎芙紗子